

2015.9  
No.169

所報ふくしま

窓

福島県教育センター

「窓」に寄せる思い

「教育に寄せる心を開く小さな「窓」」  
小さな「窓」から広がる教育の世界が見えてきます。



## 「学び続けること」

所長 渡辺 昇

昨年11月の中央教育審議会において、次期学習指導要領改訂に向けた諮問が行われて以降、「新しい時代に必要な資質・能力とは何か」に今、改めて関心が高まっています。育成すべき資質・能力については、国内外で様々な用語で提言されています。「21世紀型能力」や「ジェネリック・スキル（汎用的能力）」、OECDでは「キー・コンピテンシー」と呼んでいます。そして、この資質・能力の育成にあたって「どのように学ぶか」という時のキーワードとなるのが、「アクティブ・ラーニング（課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習）」です。この学習・指導方法は、知識・技能を定着させる上でも、また子どもたちの学習意欲を高める上でも効果的であることが、これまでの実践の成果から指摘されています。学校における授業改善を考える上で、「アクティブ・ラーニング」は今後ますます重要なものになってくると思われます。

それでは、授業改善、授業力向上を図る際に教育センターの果たすべき役割は何か。私は、教員研修の改善・充実を図っていくことが何よりも大切であると考えています。変化の激しい時代において、教育に求められるものも当然変化しており、教育センターもその変化に対応していかなければなりません。できるだけ研修者のニーズにこたえられるような講座運営を行っていかなければならないと考えています。

私自身、研修に来られる先生方と直接話をする機会は少ないのですが、研修後に書かれた受講生のアンケートにはすべて目を通すことにしています。多くの受講生から、「明日からの授業に活用できる内容でためになった。」「自分の知識・技術の未熟さを痛感した。やはり研修が必要であるとわかった。」「いい刺激を受けて、明日からがんばろうという気持ちになった。」「機会があればまた参加したい。」などの前向きな感想が寄せられていま

す。受講後、充実感、達成感を得られる先生方が多いことは、実施側としても大変うれしく、励みにもなります。

今年の小学校経験者研修Ⅰの受講生からは、閉講式後、感謝の言葉とともに、「今回の研修は、これまでの振り返り、また新たな知見を得られた三日間でした。私たちは福島県の教員でいられたことが幸せであることを改めて実感しました。これからも福島県の未来をつくる職にあることを自覚しつつ、現場での子どもたちに学びを還元できるよう努めていきたいと思えます。」という力強い言葉もいただきました。このような熱い情熱と高い使命感をもつ、たくさんの方々が福島県の教員にいられていることを頼もしく感じています。

日常業務で忙しく、研修に参加する余裕がないという先生方もいらっしゃると思いますが、授業改善、指導力向上のために、ぜひ教育センターを活用していただきたいと思えます。教育センターとしても、受講生の感想・声を参考に、講座の一層の充実を努めてまいります。

インド独立の父と呼ばれるマハトマ・ガンジーに次の言葉があります。

「明日死ぬかのように生きよ。  
永遠に生きるかのように学べ。」

学ぶということに終わりはない。一瞬一瞬を精一杯生き、最後まで学び続けることが大切であることを示しているものと思われま。子どもたちにどのような力をつけるのか、指導方法をどのようにしていくのかなど、私たち教師は常に学び続けていかなければなりません。未来ある子どもたちを育てるといふ重い職責を遂行するためにも、絶えず研修に努め、自らの資質・能力を向上させていくことが求められます。福島県の未来を担う子どもたちを育成するために、共に力を尽くしましょう。

本誌に関するご意見・ご感想、並びに研修に関するご質問等がございましたら、下記連絡先までお寄せください。

編集発行	福島県教育センター	〒960-0101	福島市瀬上町字五月田16番地
	TEL	024-553-3141 (代表)	FAX 024-554-1588
	URL	<a href="http://www.center.fks.ed.jp/">http://www.center.fks.ed.jp/</a>	E-mail center-kikaku@center.fks.ed.jp

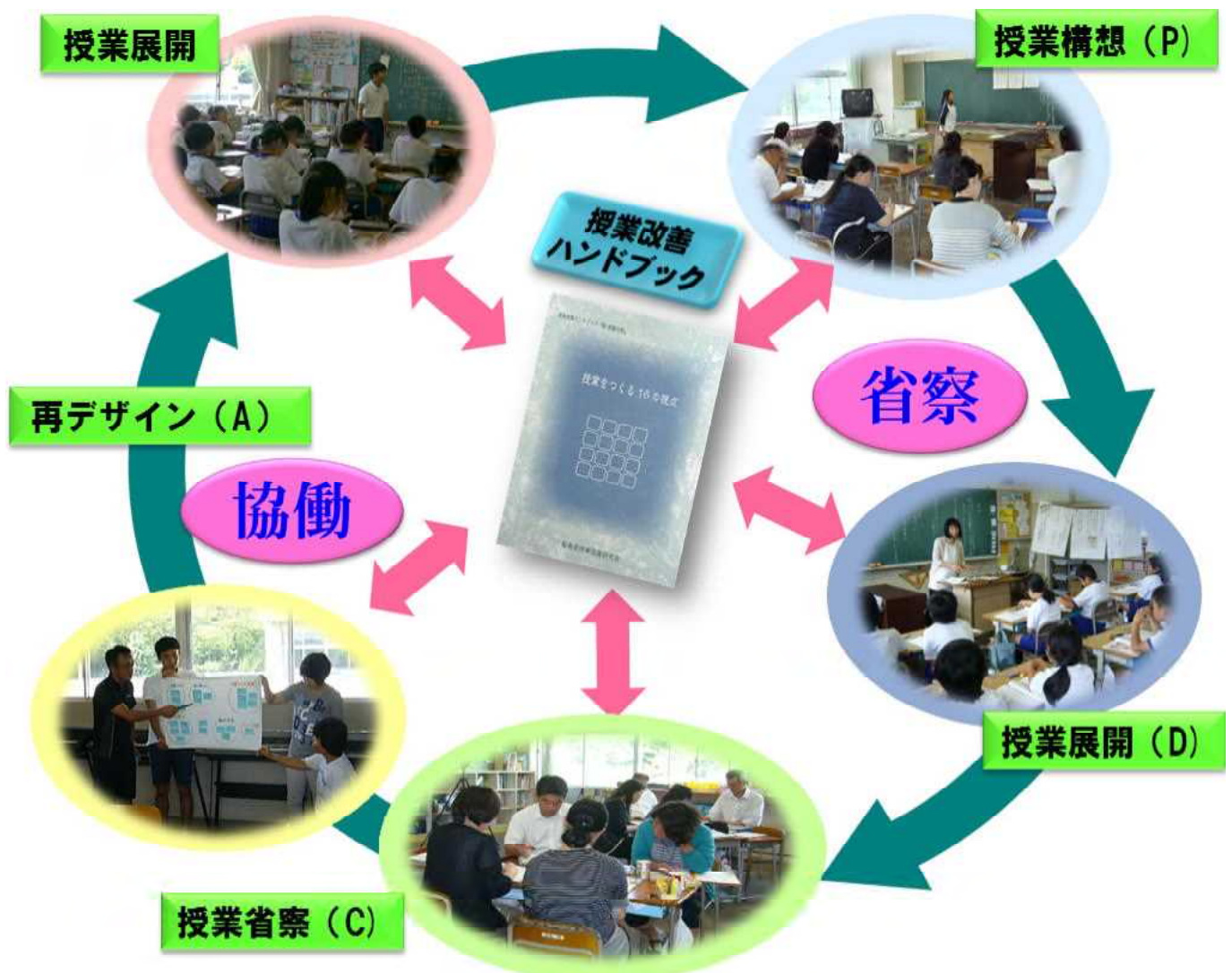
# 授業力の向上をめざす校内研修の進め方

わたしたち教師が授業力を向上させるにあたって、最も身近で重要な役割を担うのは校内研修であるといってもよいでしょう。とりわけ、授業の「設計」―「実施」―「評価」にわたって、教師集団が協働的、組織的に行う校内授業研究は、教師の授業力向上に大きな役割を担っています。しかし、校内研修における授業研究が形式的であったり、受動的であったりしてはいないでしょうか。

授業力の向上には、教師一人一人が課題意識をもって取り組むことが大切であり、また、教師が学び合える場である校内研修を充実させることも大切であると考えています。そこで、教育センターでは授業研究が教師一人一人の授業力の向上に結び付く、効果的な校内研修の進め方の一例を提案いたします。

## 校内研修改善のポイント

- 学校の課題に基づき、PDCAサイクルによって計画的、組織的に運営し、その運営と個々の教員の実践を連動させていく。
- 学校の課題を追究する中で、個々の教員の課題が結び付くように仕組み、年間にわたる授業研究が全ての教員にとって有益なものになるようにする。
- 毎回の校内研修の成果や課題について参画した教員と共に明らかにし、それらを評価し、改善策を検討することで、個々の授業改善へ生かすようにする。

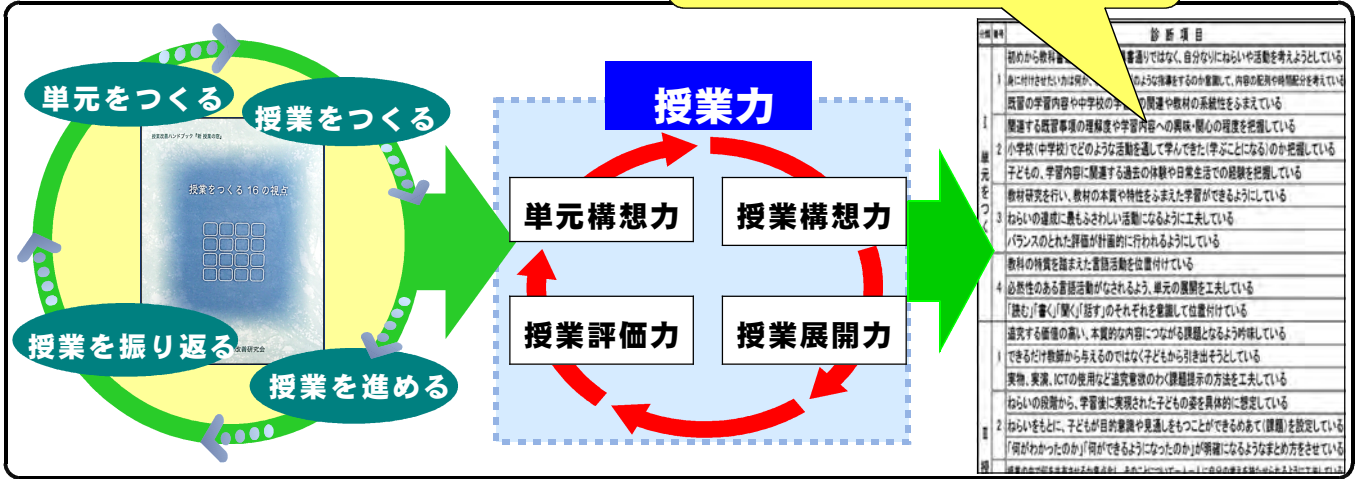


# 自己課題を明確にし、振り返りと改善を大切にして授業研究を進めましょう。

授業力の向上のためには、自己の授業を振り返り（省察）、改善に向けて努力することが大切です。そのためには、めざす授業力を分析的にとらえ、自分の授業課題を明確にして校内研修に取り組むことが必要になります。

授業改善ハンドブック『授業をつくる16の視点』を基に、授業力を分析するための48項目を設定し、「授業力チェックシート」を作成しました。

## 自分の授業力を振り返りましょう。



## 授業改善に向けた自己課題や自己目標を明確にしましょう。

### 授業力チェックシート

診断項目	1回目	2回目	3回目
初めから教科書通り、教師用指導書通りではなく、自分なりにねらいや活動を考えようとしている	4		
身に付けさせたい力は何か、そのためにどのような指導をするのか意識して、内容の配列や時間配分を考えている	3		
既習の学習内容や中学校の学習との関連や教材の系統性をふまえている	3		
関連する既習事項の理解度や学習内容への興味・関心の程度を把握している	4		
小学校(中学校)でどのような活動を通して学んできた(学ぶことになる)のか把握している	3		
子どもの、学習内容に関連する過去の体験や日常生活での経験を把握している	3		
教材研究を行い、教材の本質や特性をふまえた学習ができるようになっている	3		
ねらいの達成にもふさわしい活動になるよう工夫している	3		
パランスのとれた評価が計画的に行われるようになっている	2		
教材の特性を踏まえた言語活動を位置付けている	3		
必然性のある言語活動がなされるよう、単元の展開を工夫している	3		
「読む」「書く」「聞く」「話す」のそれぞれを意識して位置付けている	2		
適宜する価値の深い、本質的な内容につながる課題となるよう吟味している	4		
できるだけ教師から与えるのではなく子どもから引き出すようにしている	3		
実物、実演、ICTの使用など探究意欲のわく課題提示の方法を工夫している	3		
ねらいの段階から、学習後に実現された子どもの姿を具体的に想定している	3		
ねらいを達成し、子どもが目的意識や意欲をもつことができるよう課題を設定している	4		
「何がわかったのか」「何ができようになったのか」が明確になるようまとめ方をさせている	3		

### 授業力分析シート

### 「授業力チェックシート」による授業力の振り返り

### 「授業力分析シート」による課題の分析

### 授業研究における自己目標の明確化

「授業力分析シート」のレーダーチャートを基に、自己の授業力の課題を探るとともに、学校の校内研究テーマとの関連から、自己目標を設定します。

年間3回程程度の振り返りにより、高まりや変容をみる。

各診断項目について、1(劣)～5(優)の5段階で評価する。

授業研究会の充実のために、焦点化された視点で授業研究をしましょう。

何のために授業研究を行うのか、授業づくりの視点を明らかにしましょう。

### 事前研究会

#### ● 授業者

「授業力分析シート」の自己目標を基に、解決したい課題・めざしたいことを明確にして授業を構想する。

#### ● チーム(学年、ブロック、教科、年齢別等)

授業者の授業づくりの視点を尊重して、チームによる授業づくり(模擬授業、指導案検討等)を行う。

#### ● 全体

授業者の授業づくりの意図や参観の視点を共有化する。

校内研修を効率的で深まりのあるものとするため、授業研究会における話合いの視点を焦点化することが大切です。そのために、チームで、授業者の意図に沿って協働的に行う授業づくり(事前研Ⅰ)、全体で、授業者の課題や意図、参観の視点の共有化(事前研Ⅱ)を目的とした、二段階の事前研を提案します。

学年やブロック等、チームで授業づくりをすることで、授業者の思いや願いを他の教師も共有することができます。また、様々な視点を生かした授業の構想ができ、お互いの授業力の向上につながります。

事前研Ⅰ

事前研Ⅱ

参加者全員の学びにつながる事後研究会にしましょう。

### 研究授業・事後研究会

参観者は、共有した授業のポイントを念頭に置き、子どもの姿を中心に見取ります。

<授業参観の視点の例>

子どもの表情  
やつぶやき

子どもの取り  
組みや変容

授業者の投げかけに  
対する子どもの反応

子どもの  
つまずき

子どもの反応に対する  
授業者の対応



授業で見取った子どもの姿を基に、授業を具体的に振り返ります。

#### 授業者の自評

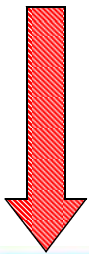
- 授業者が自分の授業の振り返りをします。

#### グループ協議 (ワークショップ)

- グループで授業を分析し、課題解決を図ります。



- 1 一人ずつ、書いた内容を簡潔に紹介しながら、ワークシートに付箋紙を貼ります。
- 2 同じような内容があれば、発言者につなげて付箋紙を貼りながら紹介します。
- 3 よかった点、課題点等の内容別に付箋紙を仲間分けし、内容に合わせて見出しを付けます。
- 4 仲間分けしたものについて、その要因を話し合います。
- 5 課題についての具体的な改善策を話し合います。



- 授業で見取った子どもの姿から、「この場面での発問はよかったか」「あの場面の対応はどうだったか」などと、具体的な事実から振り返ることで、授業者の手だての有効性や課題を共に考えていきます。
- 授業で見取った子どもの姿を中心に授業を振り返るようにすると、教科の専門性にとらわれずに意見が言えるようになります。

**情報交換  
(グループ発表)**

- 代表者がグループで話し合ったことや授業の改善策について発表します。

**授業者の  
振り返り**

- グループ発表で出された改善策について授業者としての考えを発表し、今後の実践事項を明確にします。

**授業研究会後のアクションを大切に、授業改善の日常化を図りましょう。**

**授業のよさや改善策の共有を図り、自分の授業改善につなげましょう。**

**授業改善シート**

**事後研 授業改善シートの活用** 授業研究の進め方

A 6 の用紙に記入する

授業改善シート

授業・事後研から学んだこと

授業改善の実践事項

氏名 ( )

授業・事後研から学んだこと

具体的に1つだけ書く

**授業改善の実践事項**

自分の授業にどう生かすか書く

参観者は「授業改善シート」を活用して、授業や事後研究会を通して学んだことや気付いたことなどを明確にします。自分自身の授業の改善に向けて「学んだこと」や「改善策」を具体的に記入します。

具体的な改善策を明確にすることで、その後の日常的な授業の中で、自己の授業課題の改善と学校の研究テーマに迫る授業の高まりをめざすことが可能になります。

**授業研究会の振り返りを基に、実践を通して授業改善を目指しましょう。**

授業者は、事後研究会でのワークショップの中で、具体的に出された改善策を基に、「ポイント」を絞った研究に取り組みます。この際、右に示した「授業改善実践シート」と付箋紙を活用した、「ポイント授業観察」によるチームでの授業研究会を行います。

「ポイント授業観察」<sup>※1</sup>は、授業者の授業改善の視点、自己課題の解決にポイントを絞った10～15分程度の部分的な授業の公開（自由参加）を原則として行います。

※1 具体的な手順等については、福島県教育センター「平成20年度 研究紀要 Vol.38」を参照。



**授業改善実践シート**

< 単元名・本時の目標 >

単元名 比べ方を考えよう  
本時の目標 国語、人数が異なる場合の進み具合の比べ方を理解する。

< 本時の展開・授業改善の方策 > < 反省・考察 >

1 本時の課題をつかむ。  
どのパンパロ-がこんでいるか調べるよ。

2 解決の共通点を見つめ、自力解決をする。  
< ポイント観察 10:45～11:00 >

観察の視点

○ 視点を明確にした理上げの工夫  
一人の考えをみんなに受けさせるための工夫  
・数値のよさを生かした考え方からよりよい考えを掲げさせるための配問の工夫

4 結果ごとの理由について話し合う。  
① それぞれの考えを発表し合う。  
○ 1冊あたりの人数で求めた児童  
○ 1人あたりの国語で求めた児童  
○ 公債数で求めた児童  
② 単元・標準・正確・いつでもの観点から、考えのよさに添付。  
③ 単元で求める方法を理解する

5 進み具合の比べ方を整理する。  
6 通用問題を解決する。  
7 本時のまとめをする。

参観者の付せん。授業後に貼付して授業者に渡す。

提案

## 「テーマ発問」で道徳科の授業をつくる

平成27年3月に、道徳に係る小学校、中学校、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領が一部改正、告示されました。今後、小学校は平成30年度、中学校は平成31年度より、改正学習指導要領に基づく「特別の教科 道徳」が全面的に実施されます。さらに、7月には小中学校の「学習指導要領解説 総則編(抄)」及び「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」が公表されました。いま、道徳教育は新たな歩みを始めようとしているのです。

この大きな節目に立つ私たちは、学習指導要領改訂の趣旨をどのように受け止め、どのような道徳科の授業をめざせばよいのでしょうか。「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」には、道徳科における学習について、以下の4点が示されています。

### 道徳性を養う

- (1) 道徳的諸価値について理解する
- (2) 自己を見つめる
- (3) 物事を多面的・多角的に考える
- (4) 自己の生き方についての考えを深める

これを踏まえ、教育センター専門研修「今だから聞きたい道徳教育の実践講座」では、授業改善の一方策として『テーマ発問による主題追求型の授業』を提案しました。これは、授業全体を貫く主題を明確にするように場面発問とテーマ発問を連動させ、発問構成を工夫していこうとするものです。(詳細は平成26年度 第44集 研究紀要) 以下、今年度の専門研修のキーワードに関わるポイントをご紹介します。

## 1 場面発問とテーマ発問

(東京学芸大学 永田繁雄氏による)

場面発問	教材中にある場面に即して登場人物の心情や判断、行為の理由などを問い、気付きを明らかにする発問	例：〇〇はどんな気持ちか。その時〇〇は何を考えているか。
テーマ発問	教材のテーマそのものに関わってそれを掘り下げたり追求したりする発問	例：〇〇はどんな人で、この生き方をどう思うか。この話にどんな意味があるか。□□(価値)についてどう考えるか。

## 2 中心場面における「どんな」の発問

「なぜ」を問うと原因や理由という確かなものを求めて収束的(クローズドエンド)な思考が働き、「どんな気持ち」「どんな意味」などの「どんな」を問うと、人物の一つの言動から周囲の状況や他の言動と結び付けていろいろな要素が考えられる拡散的(オープンエンド)な思考が働きます。

中心場面における「どんな」の発問によって様々な発言を引き出し、そこに児童生徒の多様な価値観を反映させます。「なぜ」の問いで教材の内容理解を図り、「どんな」の問いで登場人物の思いや意図を豊かに想像することによって、児童生徒自身が自分の価値観を自覚し、深めていくことができます。

## 3 発問構想シート

問いかける対象や主人公に対する立ち位置を意識することにより、様々な発問を発想することができます。このように多様なアプローチを織り込む複眼的・多角的な視点を持つことで、発問構想の幅が広がります。主題追求型の授業をデザインする「発問構想シート」を活用することによって、発問を吟味し、その構成について検討することができます。

# 「見るから見つめるへ 感じるから感じとるへ」

## 図画工作・美術の鑑賞教育で大切にしたいこと

美術鑑賞をめぐる様々な環境変化が起こっています。美術館と学校教育の双方で様々な理論研究や、アートゲームや対話による鑑賞、VTS などの実践事例が紹介され、美術館と学校の連携も盛んに行われるようになりました。それは、美術鑑賞を通して得られる探求的な資質や能力が、児童生徒の学びにつながるからです。しかしながら絵の見方など作品の鑑賞の仕方を学んだ経験のある教員は、ほとんどいないといってもよいでしょう。中学校、高等学校の美術の教員は、その専門的な知識で作品を理解していますが、その指導法について課題と感じている先生方も多いようです。そこで、鑑賞教育で大切にしたいことを次のようにまとめてみました。

### ➡ 美術鑑賞は創造活動である

美術鑑賞は、意味や価値をつくりだす創造活動の一環である。定まった価値や意味、知識理解だけでなく、児童生徒自身の見方や感じ方、考え方を大切にすることが必要である。まずは児童生徒の実態や発達の段階を考慮して対象や活動を考え、活動のねらいを明確にするところから始めなくてはならない。

### ➡ 決まった方法ややり方があるわけではない

鑑賞の指導法や補助教材には、決まった方法ややり方があるわけではない。方法論を重視してしまうと児童生徒の実態が抜けてしまう恐れがある。大切なことは鑑賞の視点やテーマに基づきながら活動させることである。それは鑑賞の視点やテーマを基にした児童生徒自身の見方や感じ方、考え方を保障するもので、自由に、勝手に、好きに見せることではない。

### ➡ 感覚を十分に働かす活動を設定する

鑑賞の視点やテーマを基にした活動では、視覚や触覚などの感覚を十分に働かせる活動を設定する。感性は、生まれながら持っているものではなく、環境との豊かな関わりの中で育つものとされている。児童生徒がこれまでの環境との関わりと関係付けながら題材を自分のものとして捉えることが主体的な活動へとつながる。

### ➡ 互いに批評し合う活動を取り入れる

鑑賞の活動においては、作品について互いに批評し合う活動を取り入れるようにする。それは、ことばにすることによって、それまでは漠然としていたことが明確になったり、自分一人では気付かなかった価値などに気付いたりすることができるからである。

### ➡ 知識や情報の与え方を吟味する

鑑賞する作品についての知識や情報は、教え込むようなものや、見方や考え方が限定されるものであってはならない。学ぶことで見方が深まったり、広まったりするものであることが必要である。大切なことは作品についての知識や情報は、はじめから与えるのではなく、何を、どこで、どのくらい与えるか吟味することである。

### ➡ 学習のねらいに応じたワークシート

鑑賞活動で使用するワークシートは、児童生徒の学びを補助するための教材である。決して評価するためのものではないが、学びの成果として読み取るための大きな資料となる。そのため、文章力で評価することにならないよう学習のねらいに応じた設問にすることが大切である。

鑑賞の能力は、日々の表現及び鑑賞の学習を通してはぐくんでいくものであり、特別に設定することで育成されるものではありません。日頃の授業が、児童生徒にとって「見るから見つめるへ 感じるから感じとるへ」といった活動になることが求められています。

# 平成27年度福島県教育研究発表会

～明日の福島の教育をつくる～



ふくしまからはじめよう。

Future From Fukushima.

教育センターでは、県内公立学校教員の優れた教育実践・研究及び当センターの研究の成果をもとに、意見交換や交流を通して本県学校教育の向上に資することをねらいとして教育研究発表会を実施しています。今年度は、学習指導、教科指導、教育相談、情報教育等について、6会場18件の研究・実践発表と講演会を予定しています。

講演会は、文部科学省初等中等教育局視学官 田村 学氏による『アクティブ・ラーニングが高める確かな学力』を行います。県内各教育機関をはじめ、教育に関心のある多くの方々の参加を心よりお待ちしております。詳しくは、福島県教育研究発表会2次案内、教育センターWebサイトをご覧ください。



- 期 日 平成27年11月26日(木) 9:50～16:00
- 会 場 福島県教育センター(福島市瀬上町字五月田16)
- 参加申込 教育センターWebサイトから申込用紙をダウンロードして、11月12日(木)までにE-mailで申し込んでください。

多数の御参加をお待ちしております。



## ふくしま教育総合ネットワーク(FKS)将来構想

現在、利便性の向上を目指し、クラウド化を検討しています。

### 【将来構想図】

